

精神保健福祉相談援助の基盤

問題 21 次のうち，2010 年(平成 22 年)の精神保健福祉士法改正で精神保健福祉士の義務等に，新たに設けられたものとして，正しいものを 2 つ選びなさい。

- 1 信用失墜行為の禁止
- 2 資質向上の責務
- 3 名称の使用制限
- 4 秘密保持義務
- 5 誠実義務

問題 22 次の記述のうち，社会福祉士及び介護福祉士法制定の背景として，適切なものを 1 つ選びなさい。

- 1 社会福祉基礎構造改革の議論が行われ，個人の多様な需要に対し，地域での総合的な支援のための人材が求められた。
- 2 障害福祉サービスにおいて，ケアマネジメントを用いた生活支援を展開するための人材が求められた。
- 3 増大する介護需要に対応するために，老人，身体障害者等に関する福祉に対する相談や介護を依頼することができる専門的能力を有する人材が求められた。
- 4 福祉三法が整備される中，各都道府県等に社会福祉行政を担当する人材を配置することが求められた。
- 5 高齢者が住み慣れた地域で自立した生活を営めるよう，地域包括ケアシステムの構築を推進する人材が求められた。

問題 23 次の記述のうち、ソーシャルワーカーのコーディネーターとしての役割を説明するものとして、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 クライエントの生活を支援するために、専門職間の連携を図り、連絡調整を行う。
- 2 クライエント自身が問題を解決することを可能にするため、側面的援助を行う。
- 3 クライエントの問題解決に向けて、クライエントに自発的、能動的な行動を促す。
- 4 クライエントの権利擁護のために交渉し、クライエントを保護する。
- 5 クライエントの生活問題を把握・分析し、福祉サービスの課題を明らかにする。

問題 24 「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」(2014年)におけるソーシャルワークに関する次の記述のうち、正しいものを2つ選びなさい。

- 1 実践に基づいた専門職であり学問である。
- 2 原理の一つに社会正義がある。
- 3 集団的権利ではなく個人の権利を尊重する。
- 4 西洋の諸理論を基準に展開される。
- 5 「人々とともに」ではなく「人々のために」働くという考え方をとる。

(注) 「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」とは、2014年7月の国際ソーシャルワーカー連盟(I F S W)と国際ソーシャルワーク学校連盟(I A S S W)の総会・合同会議で採択されたものを指す。

問題 25 相談援助の理念に関する次の記述のうち、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 自立支援とは、不十分な生活スキルを訓練して克服し、地域での暮らしを可能にするための実践的理念をいう。
- 2 ノーマライゼーションとは、障害者が地域において普通の生活を営むことが、当たり前である社会をつくる理念をいう。
- 3 ハームリダクションとは、罪悪感に働きかけて薬物を断つ動機を高めることを目指す支援理念をいう。
- 4 ボランティアリズムとは、国や行政による福祉サービスの恩恵を自発的に受けて自立を実現する理念をいう。
- 5 ソーシャルイクオリティとは、信頼・規範・ネットワークという人々の協調行動を重視した活動の理念をいう。

問題 26 相談援助過程におけるインテークに関する次の記述のうち、適切なものを2つ選びなさい。

- 1 面接は複数回に及ぶ場合がある。
- 2 クライアントとの契約から始まる。
- 3 クライアントの主訴を明確化する。
- 4 クライアントと一緒に援助計画を考える。
- 5 ラポール形成にこだわらずに多くの情報を収集する。

問題 27 次の記述のうち、精神科医療機関に勤務する専門職が患者に対して行う業務として、正しいものを1つ選びなさい。

- 1 公認心理師は、主治医の指示がなくても心理検査や心理療法を実施することができる。
- 2 薬剤師は、医師等の処方箋に疑わしい点がある場合には、自身の判断で調剤変更することができる。
- 3 看護師は、薬剤の投与や採血、創部の処置などを、医師の指示なく、自身の判断で行うことができる。
- 4 作業療法士は、医師の指示の下に、社会的適応能力等の回復を図るため、手芸、工作その他の作業を行なわせることができる。
- 5 精神保健指定医は、入院患者に対し、信書の発受を制限することができる。

問題 28 次の記述のうち、精神保健福祉士が行う権利擁護における発見機能として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 生活費の管理に課題を抱えるクライアントに対し、日常生活自立支援事業の活用を促す。
- 2 退院後に単身生活を控えているクライアントに対し、アパートの物件情報を提供する。
- 3 ソーシャルワークの理念と組織・制度の問題を結び付けるために、クライアント集団と地域福祉政策とを結び付ける。
- 4 市民を対象とした精神保健福祉講座の運営を通して、精神障害に対する理解を求める。
- 5 長期入院にあるクライアントに対し、地域生活のイメージを描けるような働きかけを行う。

問題 29 Dさん(43歳, 女性)は, ひきこもり経験を経て, 一人暮らしをしながらU精神科クリニックに通院している。U精神科クリニックのE精神保健福祉士は, Dさんの今後の生活について継続して相談に乗っていた。最近Dさんは通院しておらず, 気になったE精神保健福祉士が自宅を訪問してみると, Dさんは横になっており, 右足首がギプスで固定されていた。Dさんは, 「骨折して入院し, 退院してから歩くには松葉づえが必要で, 通院だけでなく買物もおっくうになっています」と話した。食卓の上には薬が入ったままの薬袋が幾つか置かれていた。E精神保健福祉士は現在の状況を踏まえ, 連携する機関を考えた。

次のうち, 連携する機関として, 適切なものを2つ選びなさい。

- 1 ひきこもり地域支援センター
- 2 地域活動支援センター
- 3 訪問看護ステーション
- 4 精神科病院
- 5 障害者相談支援事業所

(精神保健福祉相談援助の基盤・事例問題 1)

次の事例を読んで、問題 30 から問題 32 までについて答えなさい。

〔事 例〕

F さん(41 歳, 女性)は, 会社員として働いていた 25 歳の時に W 精神科病院を受診し, うつ病と診断された。その後, 幾つか通院先を変え, 1 年前から V 精神科クリニックに通っている。ある日, F さんは V 精神科クリニックの G 精神保健福祉士(以下「G ワーカー」という。)に障害年金の申請に関する相談をした。F さんとの面接の中で, 母親と H 社会保険労務士(以下「H 社労士」という。)が, 申請の手続を進めようとしていることが分かったが, F さんは, 「申請が必要なのか悩んでいるんです」と語った。そこで G ワーカーは, 「F さんとお母さんの考えを出し合ってよく話し合いましょう」と話しかけた。(問題 30)

その後, 障害年金の申請について, 主治医を交えて四者で面談するために, F さんと H 社労士が来院した。面談の中で H 社労士は, 経済的な基盤ができることが最重要ではないかと発言し, 主治医は, 継続的な受診が必要で, 年金を受給できる状態であると述べた。面談の間, F さんは押し黙ったままであり, G ワーカーは F さんの受給に対する意向や考えを明確にすることが大切だと考え, 「F さんはどう思いますか」と尋ねたところ, 「ずっと, 迷っています」とつぶやいた。そこで G ワーカーは, 「F さんの障害年金に対する思いを皆で詳しく聞いてみませんか」と提案した。(問題 31)

四者での面談から 2 週間ほど経過した後, G ワーカーは F さんに改めて意向を確認した。「母は今後の生活を考え申請を勧めてくるが, 障害者として生きていくということですよ」と話し始め, 病気にならなければ違った人生になったかもしれないという思いが語られた。そこで G ワーカーは, F さんに, 同じ病気を経験した人と交流できる場を紹介した。交流の場に参加した F さんは, 参加者が自分の人生を前向きに捉えており, その場での経験が F さんにとって, 将来を考えるきっかけとなった。この体験を通し F さんは, 障害年金の申請を自分の権利として積極的に捉えるようになった。この考え方の変化を G ワーカーへ伝え, 早速, H 社労士にも連絡を取り, 受診歴や初診時の年金加入条件等を調べてもらうことにした。(問題 32)

問題 30 次のうち、この時点でのFさんの揺らぎに焦点を当てたGワーカーの声かけの根拠となるソーシャルワークの価値として、最も適切なものを1つ選びなさい。

- 1 自己覚知
- 2 人間の社会性
- 3 自己実現
- 4 変化の可能性
- 5 パーソナリティの発達

問題 31 次の記述のうち、この段階でのチームビルディングの特徴として、最も適切なものを1つ選びなさい。

- 1 チームの目標づくりを目指し、同時に各メンバーの役割について話し合う。
- 2 メンバーが集まり、各自の情報が交換され相互理解を図る。
- 3 メンバーそれぞれが振り返り作業を行い、その体験を整理する。
- 4 相互の信頼が醸成され、タスク達成に向けて実践する。
- 5 メンバー間の考え方の相違が明らかになり、役割に関する対立が表面化する。

問題 32 次のうち、事例を通してGワーカーが行ったFさんへの支援の焦点として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 父権主義の尊重
- 2 障害の受容
- 3 社会的役割の確立
- 4 不正義の解消
- 5 社会的復権の実現

(精神保健福祉相談援助の基盤・事例問題 2)

次の事例を読んで、問題 33 から問題 35 までについて答えなさい。

〔事 例〕

Ｊさん(55 歳, 男性)は, 高校生の時に統合失調症を発症したが, 今は病状も落ち着き, 通院しながらアパートで一人暮らしをしている。Ｊさんは, 3 年ほど前から, K 精神保健福祉士が勤めている地域活動支援センターで週に 1 ～ 2 日過ごしているほか, 昨年からは月に 1 度保健所で開かれている「精神保健福祉を考える集い」(以下「集い」という。)に参加している。「集い」では精神障害当事者のほか, 病院や地域の精神保健福祉士や地域住民など 20 名ほどが集まり, その月の出来事などを語り合っている。「集い」の代表は統合失調症を経験したＬさんであり, 「集い」の運営や事務を行っている。人との交流の少ないＪさんにとってはいろいろな人と出会う大切な機会となっている。ある日, K 精神保健福祉士は暗い表情をしたＪさんから, 「Ｌさんが県外に転居することになった。Ｌさんがいなくなったら『集い』はどうになってしまうのだろう」と消え入るような声で相談を受けた。(問題 33)

Ｌさんの転居後約 1 年の間に, 様々な広報活動の効果もあり, 「集い」は精神障害当事者の参加が増え, 病気を抱えながら生活する日々の出来事が前向きに捉え直されたり, 元気づけられたり, また地域住民との間で共有される場面が多くなった。やがて「集い」には精神科病院から, 「ここで話されているようなことを入院中の方とも話してほしい」という依頼が来るようになった。Ｊさんも数回精神科病院で入院中の方と話をした。ある日Ｊさんは K 精神保健福祉士に, 「入院中の方に退院後の生活や自分の体験を話すことで自分が人の力になれるように感じた。精神科病院を訪問した仲間たちの間で, 『このような活動を続けるために精神障害当事者の会を立ち上げたい』と話しているので相談に乗ってほしい」と伝えた。(問題 34)

K 精神保健福祉士は, 地域活動支援センターで一人静かに時を過ごし, 「集い」に参加し始めた頃のＪさんを思い出し, 「Ｊさんは変わられましたね」と声をかけた。(問題 35)

問題 33 次の記述のうち、この時のK精神保健福祉士の対応として、適切なものを2つ選びなさい。

- 1 Jさんに、Lさんの後を継ぐように勧める。
- 2 JさんのためにLさんに連絡を取り、方針を決めてもらう。
- 3 Jさんの「集い」に対するこれまでの気持ちを聞き取る。
- 4 Jさんのために「集い」に参加し「集い」が継続するように、力を尽くす。
- 5 Jさんに、他の参加者と一緒に「集い」のこれからを考えていけるよう促す。

問題 34 次のうち、Jさんたちが始めようとしている会の活動として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 コンサルテーション
- 2 スーパービジョン
- 3 ソーシャルアクション
- 4 ピアサポート
- 5 アファーマティブアクション

問題 35 次のうち、K精神保健福祉士の発言の背景にある考え方として、適切なものを1つ選びなさい。

- 1 リカバリー
- 2 コ・プロダクション
- 3 コンピテンス
- 4 ライフヒストリー
- 5 ワークビリティ